

## 第10回 外国語コンテスト

### 英語部門

2005年度外国語コンテスト・英語部門は11月29日に行われた。参加者は前年度をやや上回る8名だった。課題は前年と同様、自作の英文を覚えてきて発表するというもので、今回も非常に優れたスピーチが集まったのではないかと思う。審査員は例年通り、本学名誉教授の池稔氏と法学部教授のジョン・ハミルトン氏に担当して頂いた。

上位入賞者のうち、第1位の白鷺さんは昨年、一昨年に引き続き三年連続の優勝であり、内容は彼女自身のお母さんについてのものだった。ユーモア溢れる語り口で聴衆の笑いを誘いつつも、同時にお母さんに対する深い尊敬と愛情の感じられる、素晴らしいスピーチだったと思う。

第2位の杉本藍さんと第3位の佐々木泰司君は、たまたま2人とも自身のカナダでの体験について述べた内容のスピーチだった。杉本さんのものは、初めての海外体験としてのカナダでのホームステイの思い出についてである。言葉の壁に苦しみつつも、ホストファミリーの暖かい態度に励まされたという内容で、これからホームステイを考えている人たちには、とてもよい参考になったのではないだろうか。佐々木君のものは、カナダの農場での辛い仕事のことや職を見つけようと苦労した体験についてであり、かなりユニークで興味深い内容だったと思う。 (多田哲也)

### ドイツ語部門

2005年度の名古屋語学教育研究室主催第11回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2005年12月6日(火曜日)の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟211教室でおこなわれました。その

結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回は、ドイツ語の統一テキスト „Lernziel Deutsch. Grundstufe 1.“ の Reihe 12 の Text A „Welche Ausbildung haben Sie?“ の前半を課題に選びました。これはドイツの教育制度に関するインタビューを再現したテキストです。このテキストに関していえば、文法はそれほど難しいものではありませんが、教育制度に関する専門的な用語が多く、なかでも外来語に由来する単語も多く、アクセントの位置が特有な点など発音等に注意が必要なものです。参加者にとって念入りな準備が必要な課題となりましたが、参加者は例年を大きく上回り19名もの参加者がありました。

審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私(島田了)の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように、内容としては決して簡単ではないテキストにも拘らず、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、皆上手にその成果を披露することができました。基本となる発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、上位入賞者の間ではさらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。毎年のことですが今年も非常に接戦となりましたが、決め手となったのは、発音・アクセントのより自然な表現、滑らかさなどでした。結果は、第一位(優勝)箕浦直美さん(03M3031)、第二位鈴木まりさん(04J1298)、第三位菅生豊子さん(04J1374)となりました。

他の外国語に比べて参加者の数が少ないことが例年の課題となっていました。本年度はほぼ倍増となりました。ももとのドイツ語の履修者自体が他の外国語に比べると決して多くはない点を考慮するとこれは大健闘と考えられます。今後も

この傾向が続いてゆくように、何らかの形で工夫して、多くの参加者が集まるようにしたいと思います。毎年のように感心することですが、法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

実用という点では、英語や中国語などに比べて弱いドイツ語ですが、本学の学生の中には外国語の学習そのものを楽しむことが出来る学生が育っていることのあらわれではないかと思っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員の方みなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。(島田 了)

## フランス語部門

フランス語部門の本選は2005年11月25日(金曜日)に、国際コミュニケーション学部のラッセン教授を今年も審査委員長としてお招きして実施された。コンテスト出場者は8名で、例年に比べるとやや少なかったが、フロアには20名以上の聴衆を集めてにぎやかに行われた。

出場者が多い年は予選と決戦に分けて、予選通過者が決戦に臨むという形を取っていたが、今年は全員で予選と決戦を行った。予選ではシャルル・ペローの赤頭巾ちゃん(Le Petit Chaperon rouge)を事前に配布して当日朗読してもらい、本選では初見のシャンソンのNon, je ne regrette pas.を朗読してもらった。なお、参加者のうち、白鷺さんと飯田誓悟君は自作の作文を用意してくれたので、あわせてそれも朗読してもらった。

私は実は外国語コンテストには初めて参加させていただいたが、きわめてレベルの高いコンテストであることにすぐに気づいた。名古屋校舎での第2外国語の授業時間数から考えると、信じがたいほどしっかりした発音で、外国語をマスターす

るのは何よりも本人のやる気次第だということがよくわかった。各自がコンテストに向けて、あるいは普段から、いかに熱心に勉強しているかがうかがえた。

審査委員長のラッセン先生もどのように順位をつけるか苦労されたようだが、最終的には、以下のとおり入賞者が決まった。

第1位 03M3149 飯田 誓悟

第2位 04M3011 林 将希

第3位 02M3378 白 鷺

飯田君は正確な発音と同時に、立派なフランス語で書かれた自作の作文が高く評価されて、1位を獲得した。2位の林君は2年生ながら、先輩に勝るとも劣らぬしっかりした発音が評価された。白鷺さんは昨年より順位を二つ落としたとはいえ、3年連続しての入賞は賞賛に値する。その他、入賞はできなかったが、枠があれば入賞させてあげたかったほどのレベルの人が数名いた。

昨年から名古屋キャンパスのスタッフの一員として仕事をさせていただいているが、今回、コンテストに参加させていただいて、教育観が180度変わるほどの衝撃を受けた。昨今の学生は勉強しないと悪口ばかり言われるが、そんなことは決してない。学生諸君の潜在的な能力をどれだけ引き出せるか、そのために教師として何をしなければならぬか、答えは簡単には出ないが、改めて考えさせられた。2006年以降もぜひともこのコンテストを盛り上げていきたいと思う。(中尾 浩)

## 中国語部門(法・経営)

中国語コンテスト「法・経営部門」は、2005年11月17日(木)13時30分より205教室で行われました。全体の出場者は前回よりやや少ない36名でしたが、基礎部門には昨年を上回る学生が参加しました。また、今回は上級中国語クラスからの積極的な参加が目立ち、中国語に対する学生の熱意が感じられ嬉しく思いました。

例年同様、コンテストは課題文の朗読で行われました。基礎部門が「私の一日」と題する話で、

応用部門が「飲酒」という中国の笑い話でした。上級中国語クラスからの参加者が多かったこともあり、非常にレベルの高い競争になりました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 03M3057 松原 梨紗
- 2位 03M3323 服部 あや
- 3位 03SJ1064 神谷 健司

(鄭 高咏)

## 中国語部門 (現中)

第11回外国語コンテスト中国語現中部門は、2005年11月17日木曜日15時30分から、自由部門と課題部門の順で行われました。出場者は自由部門が4名、課題部門が14名でした。審査には、顧明耀先生と安部悟先生に加わっていただきました。

自由部門では、各出場者が自らの体験に基づいて中国語で作文したものを、情緒豊かに発表しました。厳正な審査の結果、次の1名が入賞しました。

- 1位 02C8002 鷺東 汐美

鷺東さんは、「小小的幸福 (小さな幸せ)」というタイトルで、アルバイトで知り合ったおばあさんとの出会いから、幸せとは身近にある些細なことから始まることに気づいた、と語ってくれました。

課題部門は、「中国人喜欢双数 (中国人は偶数好き)」という文章の暗誦でした。中国人は贈り物をするときや結婚に関するいろいろな場面で偶数を重んじるという内容で、少々難しかったです。出場者はみな頑張って暗誦しました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 05C8150 伊藤 えり
- 2位 05C8066 永谷 明香
- 3位 05C8082 成瀬 彩

(中川裕三)

## 韓国・朝鮮語部門

第11回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」本選は、'05年12月1日(木)午後2時開催。審査員2名(陶山信男先生、常石希望)に加え、'06年度から韓国・朝鮮語を兼任される田川光照先生もアドバイザーとして参加下さった。

参加学生は2年生を中心に40名。日頃の成果を堂々と発表し、その全体のレベル高さには、田川先生も驚いておられた。今回も審査は困難をきわめたが、以下の諸君が入賞となった。

- 1位 04J1375 田中 優貴 (たなか ゆうき)
- 2位 02J1372 小島 健志 (こじま けんじ)
- 3位 04J1244 丹羽 俊介 (にわ しゅんすけ)

しかし、次の諸君も入賞者に劣らない成績であったことを記しておきたい。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 04M3244 西村一騎  | 04M3066 西川一哉  |
| 04J1255 山本千尋  | 04J1281 森 淳二  |
| 04J1368 治根田夕希 | 04J1245 加重理子  |
| 04M3214 河内隆師  | 03C8101 森 美由紀 |
| 03J1071 水野 誠  |               |

(常石希望)

## 日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題でした。

法・経・現中三学部の1年生は伝統的に全員参加しています。60名近くにもなりますから予選を行います。予選で20名ずつに分かれた各クラスから3名の代表者が選ばれ、9名が本選に進みました。本選へは他の学年の誰でも出場できますが、今回は申し込みがなく、2005年11月17日、1年生8名で競うこととなりました(1名欠場)。

昨年はアルバイトを題材としたものが多かった

のですが、今年は多様でした。日本で見た環境問題を題材にしたものもあり、愛知万博の影響もあったのではないかと思います。イントネーション、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭にスピーチに取り組みました。どれも内容豊かで、聞き手を納得させるものでした。

審査は、教員 2 名（架谷・梅田）、学生審査員 2 名、聴衆約 50 名の投票によって行い、熱い空気の中、3 名の入賞者が決定しました。

1 位 05M3340 孫瑛英「日本人が教えてくれたこと」

2 位 05M3341 王曉華「頑張ってね！」

3 位 05M3338 孫逢敏「ステレオタイプ」

（敬称略）

最後に一言。日本人学生のみなさんはコンテスト日本語部門には参加できませんが、ぜひ一人の聴衆として留学生の声を聞きに来てください。きっと新しい発見があるはずです。（梅田康子）



## 外国語コンテスト入賞作



### 英語部門

#### 第 1 位 My mamma

02M3378 Bai Lu

Hello, everyone. Have you thought of your mamma for real? I haven't. However, my mamma sometimes tells me that she would like to write a book about me when she retires from her company. Today I want to tell you about my mamma. She is an unusual mamma and she is an unusual woman as well.

First of all, I will tell you my unusual mamma. I say she is unusual because she doesn't do what a mamma is expected to do in the family. She doesn't have enough time to do much housework. At dinner time we often have to have a burnt fish, burnt meat or burnt vegetables because she has to answer phones, write letters, and think what happened in the day while cooking. Once, when she was putting oil into the can, she forgot it and the oil spilled from the can. So I hadn't been able to sleep well because of the smell of the oil for two weeks. When I was sick, she has never stayed with me or took me to the hospital, because she uses all the time on her work. And I also remember that when I was a junior high school student, she came to see my sports meeting and recorded it on the video. But afterwards at home we found that the girl she recorded wasn't me. You know, Japanese junior high school students all dressed the same.

Then, as a woman my mamma is unusual too. She doesn't work for the money but for her belief that China and Japan should have amity in the level of citizen. When I was three years old, my mamma passed the examination for a program promoted by Chinese government to send Chinese bachelor to study in Japan. Only two bachelors passed the examination, and my mamma was one of them. She studied in the post-graduate course at Tsukuba University. My mamma told me that when she first arrived at Narita Airport, she couldn't believe that Japan is so developed; for she read in the text book that most people living in the capitalism country like Japan were poor and exploited by the bourgeois. However, what my mamma saw was different. Since that time, she